

目的 琉縫という語が文献に見られ、土着語でシマヌイと呼ばれているが、これについて具体的に総合的に書かれた書はない。本研究は琉球服の縫技術の総合的研究と記録を目的とする。

方法 琉球服といっても地域により着装様式や概念に差があるということを開き取り調査によってわかった。今回の調査地域は、首里、那覇、田舎(離島も含む)のそれぞれの一部に限り、辻(遊郭)にはふれていない。首里、那覇、竹富島のハカマ、各々一点、小浜島の紅型打掛一点、西表島のステイナ、タナシ、パティン、各々一点、与那国島のドタティ一点、宮古島の芭蕉衣二点、大宜味村のドゥゲンと打掛各々一点、黒島の紅型打掛二点、沖縄県立博物館所蔵のハクター一点、ドゥゲン二点、合計17点について着物の形造的、構造的特徴と縫方の特徴を調べた。

結果 I、琉縫に共通する特徴は、<sup>●</sup>く<sup>●</sup>ける<sup>●</sup>ということをしな<sup>●</sup>い本縫<sup>●</sup>だけである。Ⅱ、袖口、衿端、衿下等の箇所<sup>●</sup>に布端<sup>●</sup>を折ら<sup>●</sup>ない耳<sup>●</sup>ヅ<sup>●</sup>かい<sup>●</sup>をする。Ⅲ、アルラッピ<sup>●</sup>ーイ<sup>●</sup>と<sup>●</sup>い<sup>●</sup>っ<sup>●</sup>て身頃<sup>●</sup>に布巾<sup>●</sup>い<sup>●</sup>っ<sup>●</sup>は<sup>●</sup>い<sup>●</sup>つ<sup>●</sup>か<sup>●</sup>う。このような素朴な縫技術であると同時にワチスビ、首里ハカマの構造、リバーシアルの打掛やドゥゲン、と合理的面もある。Ⅳ、ハカマの構造、ステイナ、ドゥゲン等の衿の構造に地域差がみられる。Ⅴ、琉球に染、織が発達した割に縫技術は一般に素朴である。一方、博物館所蔵の朝鮮服風な衣に複雑な縫技術がみられる。これらのことから、琉球では古<sup>●</sup>と<sup>●</sup>も<sup>●</sup>と縫<sup>●</sup>わ<sup>●</sup>ない被覆<sup>●</sup>型<sup>●</sup>の着物<sup>●</sup>があ<sup>●</sup>っ<sup>●</sup>て、中<sup>●</sup>國<sup>●</sup>、朝<sup>●</sup>鮮<sup>●</sup>、日<sup>●</sup>本<sup>●</sup>等との交流によりかなり後年、"縫う"ということが成立したと推論する。